

## 『桑原武夫集』全10巻、岩波書店（1980～1981）総目次（編集人作成）

## 1 1930～1945

尾上郷川と中ノ川  
スタンダールの芸術について  
積雪期の白根三山  
スタンダール  
虚子の散文  
服装と行為  
山岳紀行文について  
あの頃のこと  
小説の読者  
富岡鉄斎展を見て  
能郷白山と温見  
湖南先生  
『遠野物語』から  
パリの公園  
ファーブル博物館  
ブルターニュ紀行  
パリ大学開講式  
文学的フランス  
アラン訪問記  
パリの本屋など  
早春日記  
ドイツ紀行  
ラシーヌへの道  
ニームの闘牛  
美術品の防衛  
山遊び  
慰戯としての文学  
『古代弁自序』を読んで  
鈴鹿紀行  
キーツの墓  
フーレ先生  
コンパニョナージュ  
アメリカ大陸  
黒人街  
モンテーニュの城  
スタンダール遺跡めぐり  
政治遊戯  
芸術家の実生活と作品  
戦時下の登山  
鳥の死なんとする  
展墓  
詩人  
二十年前の三好達治君  
歴史と小説  
登山の文化史  
『クレヴの奥方』について  
『三国志』のために  
ざくろの花  
書物について  
五十マルク札  
外国文学研究の反省  
ヴァレリの『スタンダール論』  
現代フランス・ヒューマニズム  
町一番の風呂

西田先生の一面

## 2 1946～1950

趣味判断  
文学修業  
日本現代小説の弱点  
断想  
ものいいについて  
フランスの一左翼作家  
ブルデル雑記  
文芸俗話  
西洋文学研究における孤立化について  
アランの政治思想  
第二芸術  
三好達治君への手紙  
短歌の運命  
洞察について  
谷崎潤一郎氏のインエイ・ライサン  
横光利一氏の『秋の日』  
芭蕉について  
パリの下宿  
マルロー研究  
ずり落ち  
反訳について  
文学における伝統  
地方文化私見  
織田作之助君のこと  
フランス文学におけるドイツの影響  
君山先生  
やむを得ぬ滅亡  
スタンダールの世界文学賞  
エコール・サントラル精神  
仙台を去るにあたって  
歴史と文学  
『イタリア絵画史』のスタンダール  
レーヴィットの『ヨーロッパのニヒリズム』  
戦後の宮本百合子  
伝承問答  
高原の幸福  
法隆寺の壁画  
平和の発見  
文学者と酒  
人間認識  
フランス的ということ  
書評のない国  
人間の戦い  
素朴ヒューマニズム  
読みそこない  
文学批評について

## 3 1950～1953

文学入門  
鷗外と不俗

宛名のない手紙  
ジッドの死をきいて  
私の読書遍歴  
『ルソー研究』序言  
ルソーの文学  
伝統  
北海道断想  
鷗外の『高瀬舟』そのほか  
ヘミングウェイ『武器よさらば』  
あくまで平和を  
西洋文学研究者の自戒的反省  
人間性の試金石  
今日における歌舞伎  
読書  
漢文必修などと  
文化遺産のうけつぎ  
丁玲における尖鋭さ  
アラン  
南方熊楠の学風  
予想あそび  
日本映画の成長  
杜甫の『贈衛八処士』について  
パスカルの時計のパンセの一解釈  
『魯迅評論集』を読んで  
みんなの日本語  
家元制についての私的感想  
外国人を招くことについて  
伊東静雄の詩  
三好達治の『測量船』について  
文学とはなにか

## 4 1954～1956

考古遊記  
アマクチの流行  
榊亮三郎先生のこと  
平和運動と誓い  
文学批評と価値判断  
『百科全書』の芸術論  
啄木の日記  
『七人の侍』  
旧友の文章  
日本知性への注文  
敗戦前後  
自己解説  
学問を支えるもの  
しろうと農村見学  
河上肇『自叙伝』  
トルストイ『戦争と平和』入門  
『近松物語』の感動  
ソ連の宗教  
アルメニア紀行  
ショーロホフ五十の賀  
ソ連・中国の乾燥性

社会主義国の女性雑感  
四川紀行  
日本文化論のあり方  
明治の再評価  
博雅の士貝塚茂樹  
漢の高祖の『大風歌』について  
歴史における人間の尊重  
恐怖政治の大天使・サン＝ジュスト  
幼いころの絵本  
森外三郎先生のこと

## 5 1957～1959

ニアリング夫妻との一タ  
ノーマン博士の思い出  
『大菩薩峠』  
西堀南極越冬隊長  
日本的とはなにか  
芸術の社会的効果  
郭沫若氏の一面  
『明治天皇と日露大戦争』  
国際ペン大会の印象  
伝統と近代化  
『揚州八怪』から  
河野学派の落第生  
第一級の文化論  
美人観を調査する  
国文学のあり方  
チョゴリザ登頂  
現代日本における古典のあり方  
科学技術時代と古典の運命  
フランス・ナショナリズムの展開

## 6 1959～1964

研究者と実践者  
日本の教育者  
叱るといふこと  
ケンソン  
眠り上手  
一九六〇年論壇時評（十二篇）  
日本は小国ではない  
ひとはいさ  
宇宙時代と古典  
人を知る明のない先輩  
伊勢神宮の国有化  
私のノンフィクション  
ジャワの十日間  
安保阻止運動  
青年の冒険精神  
永井荷風  
ショーロホフ『静かなドン』  
中野重治をめぐる雑談  
ナショナリズム論について  
日本文化の考え方  
日本文化雑感

仲間の結合  
存在としてのインド  
大正五十年  
インド史学界の新巨星  
ローマ字新聞  
シンポジウムに招かれての感想  
緑のしげみ  
柳田さんの一面  
ルソー思想の世界への浸透  
パワー・ポリティックス  
アフリカひとのぞき  
松本清張の文学  
インド・ネパールの旅  
現在も生きる心情  
狩野先生逸事  
後進国問題の考え方  
おやじ  
ベンガルの槍騎兵  
錬金術師の早技

### 7 1965~1969

近代日本における歴史学  
ある明治のナショナリスト  
萩原朔太郎の庭見物  
憲法第一章についての感想  
ふたたび江刈村へ  
ベトナムについての感想  
和魂洋才の変転  
人間兆民  
ふるさとを行く  
心の痕跡  
今西錦司論序説  
名を知っているということ  
東北の可能性  
明治百年を迎えて  
こころづくし  
小島祐馬先生を偲ぶ  
『桂春団治』序にかえて  
近代化における先進と後進  
文学価値論  
人民史家ミシュレ  
私のなかの中国

ヨーロッパと日本  
人文科学における共同研究  
読書家と観察者  
仙台の五年間  
中天に輝く天体  
桑原隲蔵小伝  
父の手帳  
トレギエから  
トレギエの二週間  
現代社会における芸術  
日本の百科全書家新井白石

### 8 1969~1974

思い出すこと忘れえぬ人  
ブータン入国記  
一致と影響  
『中央公論』創刊一〇〇〇号を迎えて  
流行言  
ヨーロッパ文明と日本  
奇人  
駒井能登守のために  
林達夫について  
カタカナの氾濫  
昔話  
人間性について  
三上章を惜しむ  
書についての雑談  
夢  
川端康成氏との一タ  
大事件にひもをつけよ  
松本清張の処女作  
平和の条件としての文化  
大学生と俳句  
世界の日本学  
明治革命と日本の近代  
石油の国  
モスクワとバクー  
ヨーロッパの出かせぎ労働  
志賀高原と三好達治  
志賀さんの思い出  
好きなことば  
奈良時代の志賀さん

永井荷風の生活と芸術  
鉄斎の芸術

### 9 1974~1977

論語  
現代日本文明について  
本当の政治論  
今西錦司について  
ニーダム博士と私  
中江兆民の洞察  
おのずと  
丸山薫弔辞  
シルクロードの旅から  
元号について  
トルコの印象  
トインビー『図説歴史の研究』について、  
日本論壇の弱点  
町的美観は誰のものか  
現代本文明について  
文学における悪  
柳田国男『遠野物語・山の人生』解説  
内藤湖南『日本文化史研究』解説  
壮絶な準備  
青果雑感  
西洋音楽と中国・日本  
天下の大勢  
達人マルローについて  
知的関心としての民俗学  
私の敦賀  
左派の長者  
都のかたち  
竹内さんと私

### 10 1977~1980

懐しい土居先生  
三つの挿話  
日本のフランス文学研究にのぞむ  
紀元二〇〇〇の挑戦  
未見の知己

ヨーロッパの印象  
兆民への接近  
インディオの山高帽子  
中国について  
年の初めの願いごと  
宇野久夫『髪形の知性』序にかえて  
半世紀の思い出  
別荘  
ルソーの魅力  
歴史と人間  
工業化時代におけるクラフト  
加藤周一氏をめぐる断片語  
内発的文化の知的創造性について  
甘くない国際理解をゼイタクということ  
八木一夫弔辞  
虚子についての断片二つ  
名和君の酒、  
国際ペン大会に参加して「文化力」ということ  
富士正晴の詩  
追憶  
風俗学とその周辺  
国際コミュニケーションと日本文化  
弔カイヨワ  
朝永さんのこと  
吉川君のこと  
文章作法  
高仙芝について  
木村さん  
甲信越と私  
中国に父をしのぶ  
着任  
文字村疎開記  
自由・平等・友愛と現代世界  
推薦文（四十四篇）

## 『桑原武夫全集』全8巻、朝日新聞社（1968~1972）総目次（編集人作成）

### 第1巻

文学とはなにか  
文学入門  
小説の読者  
慰戯としての文学  
芸術家の実生活と作品  
孤独について  
日本現代小説の弱点  
文学批評について  
文学批評と価値判断  
芸術の社会的効果  
ヘミングウェイ『武器よさ

らば』  
ショーロホフ『静かなドン』  
トルストイ『戦争と平和』入門  
漢の高祖の『大風歌』について  
杜甫の『贈衛八處士』について  
鷗外と不俗  
石川啄木  
啄木の日記  
永井荷風

戦後の宮本百合子  
三好達治君への手紙  
三好達治の『測量船』について  
伊東静雄の詩

### 第2巻

文学的フランス  
フランス的ということ  
現代フランス・ヒューマニズム  
ラシーヌへの道

パスカルの時計のパンセの一解釈  
『クレヴの奥方』について  
スタンダールの芸術について  
スタンダール  
『イタリア絵画史』のスタンダール  
ヴァレリの『スタンダール論』  
中天に輝く球体

アラン  
アランの政治思想  
ジッドの死をきいて  
フランスの一左翼作家  
マルロー研究  
フランス文学におけるドイツの影響  
西洋文学研究における孤立化について  
西洋文学研究者の自戒的反省  
コンパニョナーージュ  
政治遊戯  
フランスの室内遊戯  
(フランス・)ナショナリズムの展開

## 第3巻

ひとはいさ  
洞察について  
第二芸術  
芭蕉について  
短歌の運命  
文学修業  
文芸俗話  
谷崎潤一郎氏のインエイ・ライサン  
横光利一氏の『秋の日』  
文学者と酒  
美術随想  
なぜ小説を読まないか  
今日における歌舞伎  
家元制についての私的感想  
富岡鉄斎展を見て  
『遠野物語』から  
『三国志』のために  
南方熊楠の学風  
『大菩薩峠』  
『揚州八怪』から  
劇場での感想  
映画論(六篇)  
ものいいについて  
むつかしすぎる  
反訳について  
漢文必修などと  
むつかしい文章  
みんなの日本語  
国文学のあり方  
宇宙時代と古典  
ローマ字新聞  
伝承問答  
文化遺産のうけつぎ  
伝統  
伝統と近代化  
日本文化の考え方  
日本文化雑感  
歴史と小説  
伝統と民族性  
文学における伝統  
歴史と文学  
国民文学論について  
歴史における人間の尊重

近代日本における歴史学

## 第4巻

人間認識  
湖南先生  
君山先生  
狩野先生逸事  
森外三郎先生のこと  
西田先生の一面  
榊亮三郎先生のこと  
柳田さんの一面  
ある明治のナショナリスト  
河上肇『自叙伝』  
『桂春団治』序にかえて  
詩人  
萩原朔太郎の庭見物  
二十年前の三好達治君  
錬金術師の早技  
中野重治をめぐる雑談  
今西錦司論序説  
西堀南極越冬隊長  
旧友の文章  
博雅の土貝塚茂樹  
ベンガルの槍騎兵  
やむを得ぬ滅亡  
織田作之助君のこと  
人を知る明のない先輩  
アラン訪問記  
フーレ先生  
ニアリング夫妻との一タ  
郭沫若氏の一面  
ノーマン博士の思い出  
恐怖政治の大天使・サン＝ジュスト  
ざくろの花  
書物について  
展墓  
町一番の風呂  
車中にて  
仙台を去るにあたって  
高原の幸福  
私の行楽  
月のことば  
叱るということ  
ケンソン  
眠り上手  
心の痕跡  
趣味判断  
アマクチの流行  
美人観を調査する  
研究者と実践者  
日本の教育者  
科学振興と国語問題  
科学技術時代と古典の運命  
日本学術会議のために  
大学における自由の考え方  
『ルソー研究』序言  
人文科学における共同研究  
桑原隲蔵小伝  
おやじ  
こころづくし  
私のうけた家庭教育

幼いころの絵本  
一度もない転機  
河野学派の落第生  
仲間的結合  
初期の文章三篇  
自己解説

## 第5巻

鳥の死なんとする  
断想  
文学雑誌のあり方  
角帽  
法隆寺の壁画  
平和の発見  
引揚げ  
或る小事件  
人間の戦い  
素朴ヒューマニズム  
宛名のない手紙  
私はユートピアなどいらない  
あくまで平和を  
外国人のいうこと  
人間性の試金石  
講和を祝う歌について  
日本インテリの弱さ  
ナショナリズムと文化  
予想あそび  
外国人を招くことについて  
思想の自由と伝統  
鴨東線は早くつくるがよい  
付記 鴨東線とは、現在、大阪から三条まで来ている京阪電車線を北へ出町柳まで延長して、叡山電車と連絡せしめようとするもので、京都市会では数年来の懸案となっていた。この公聴会后、開設案が可決された。(編集人注:「現在」とは、本書発行時の1969年1月のこと)  
雲の中を歩んではならない  
平和についての架空座談会  
平和運動と誓い  
日本知性への注文  
敗戦前後  
学問を支えるもの  
明治の再評価  
日本文化論のあり方  
教養主義のゆくえ  
革命と伝統  
にぎやかな日本  
身から出たサビ  
日本的とはなにか  
進歩的ということ  
時のながれ  
ヒューマニズムを使ってみて  
私たちの憲法  
一九六〇年論壇時評(十二篇)

日本は小国ではない  
伊勢神宮の国有化  
安保阻止運動  
青年の冒険精神  
低姿勢と高姿勢  
ナショナリズム論について  
大正五十年  
パワー・ポリチ(ティ)ックス  
鉛色の空の下での断想  
論争について  
多数人口と日本文化  
見物人の感想  
憲法第一章についての感想  
ベトナムについての感想  
万国博基本理念  
市民から市民への訴え  
和魂洋才の変転  
明治百年を迎えて  
むりな注文かもしれぬが  
西洋崇拝からの脱却

## 第6巻

緑のしげみ  
早春日記  
パリの下宿  
パリの公園  
パリの本屋など  
ファーブル博物館  
パリ大学開講式  
スタンダール遺跡めぐり  
モンテーニュの城  
ニームの闘牛  
ブルターニュ紀行  
ドイツ紀行  
五十マルク札  
キーツの墓  
アメリカ上陸  
黒人街  
私のみたアメリカ市民  
訪米雑感  
モスクワ第一信  
日本語のできるロシア人  
ソ連の中学  
ショーロホフ五十の賀  
ソ連における文学研究についての感想  
アルメニア紀行  
中国の言語政策  
人民解放軍歌劇団  
新中国の見方について  
四川紀行  
私のなかの中国  
生産文化と消費文化  
社会主義国の女性雑感  
ソ連・中国の乾燥性  
共産主義国をどう見るか  
ジャワの十日間  
インド・ネパールの旅  
インド史学界の新巨星  
存在としてのインド  
アフリカひとのぞき

国際学生セミナーに参加して  
国際ペン大会の印象  
後進国問題の考え方  
近代化における先進と後進  
ヨーロッパと日本

### 第7巻

登山の文化史  
積雪期の白根三山  
能郷白山と温見  
鈴鹿紀行  
尾上郷川と中ノ川  
服装と行為  
あの頃のこと  
山遊び  
ずり落ち  
なつかしさ  
山岳紀行文について  
チョゴリザ登頂  
地方文化私見  
北海道断想

しろうと農村見学  
ふたたび江刈村へ  
東北の可能性  
考史遊記  
ふるさとを行く  
読書  
読みそこない  
書評のない国  
読書家と観察者  
松本清張の文学  
司馬文学について  
書評九篇  
すいせん文十六篇  
自著はしがき・あとがき集

### 補巻

現代社会における芸術  
新井白石の先駆性  
日本の百科全書家新井白石  
人民史家ミシュレ  
今日の世界  
林達夫について

駒井能登守のために  
松本清張の処女作  
人間性について  
平和の条件としての文化  
父の手帳  
小島祐馬先生をしのぶ  
追想——矢野仁一先生のこ  
と  
風神奔放  
高橋和巳への弔辞  
奇人  
三上章を惜しむ  
川端康成氏との一タ  
夢  
昔話  
トレギエの二週間  
ブータン入国記  
ブータン国連加盟  
名を知っているということ  
緑陰読書  
(『中央公論』)創刊一〇〇  
〇号を迎えて

流行言  
歴史のこまやかな味  
カタカナの氾濫  
幸福狩り  
書についての雑談  
大事件にひもをつけよ  
すいせん文十篇  
思い出すこと忘れえぬ人  
虚子の散文  
戦時下の登山  
ブルデル雑記  
スタンダールの世界文学賞  
エコール・サントラル精神  
ソ連の宗教  
現代日本における古典のあり方  
シンポジウムに招かれての感想

## 『文藝春秋』に収録された記事一覧

(『桑原武夫集』や『桑原武夫全集』と一部重複)

町一番の風呂 (1944.11)  
或る小事件 (1949.9)  
文學の害毒について (1951.3)  
南方熊楠の學風 (1952.12)  
みんなの日本語 (1953.4)  
忘れられぬ學者 (1954.4)  
京都學派罷り通る〔鼎談:末川博(1892-1977)・恒藤恭(つねとう きょう、1888-1967)〕 (1954.6)  
何れが是か非か (1954.10)  
あるソ連邦の共和國 (1955.8)  
自由過剰の國・日本〔対談:中谷宇吉郎〕 (1956.8)  
よき時代のよき教育者 (1956.12)  
西堀南極越冬隊長 (1957.6)  
揚州八怪から (1958.1)  
「花塚の峰」の貧乏隊長 (1958.11)  
大正五十年 (1962.2)  
中江兆民 (1964.8)  
借金の名人・三好達治 (1964.10)  
大学入試は改革できる (1966.3)  
まごころ (1967.2)

明治は日本のルネッサンス〔対談:松本清張〕 (1968.11)  
思い出すこと忘れえぬ人 (1969.1)  
港町での少年時代 (1969.2)  
錦林小学校時代 (1969.3)  
小島塾の二階の六畳 (1969.4)  
伯父さん列伝 (1969.5)  
不幸な友人たち (1969.6)  
しらくもとグループ旅行 (1970.1)  
古風な恩師たち (1970.2)  
濫読の楽しみ (1970.3)  
思い出の“にわか”師たち (1970.4)  
北海道の山旅 (1970.5)  
あこがれの少女たち (1970.6)  
“人工日本語”の功罪について〔対談:司馬遼太郎〕 (1971.3)  
ブータン国連加盟 (1972.2)  
川端さんはこんな人だった (1972.6)  
壮絶な準備 (1976.11)  
  
グラビア記事:日本の顔 (1967.2)  
グラビア記事:娘と私 (1971.12)

余談ながら、『文藝春秋七十年史〔資料編〕(1994、全510ページ)』が1923～1991年の総目次です(非売品ですが“amazon”や“日本の古書店”などで入手可能で、2024年には同様に『百年史』が出ると予想されます)。総目次を眺めていると、1945年4～9月は戦争のため休刊、さらに1947年2月号は用紙難のため休刊という事実気付きました。また、1946年2・3月と4・5月はそれぞれ合併号になっています。当時の状況が伺われます。

編集人